

天才
第二王子は
引きこもり
たい

【穀潰士】の無自覚無双

3

柊 彼方

Hiragi Kanata

ilust.

ぺんぐう

ファルロス

独立都市を統治する、
神と呼ばれる男。
ニートたちにある試練を課す。

タロウ

魔国の北に位置する
独立都市の住人。
ニートとテトの案内役となる。

アレク

アストリア国第一王子で、
ニートを溺愛している兄。
弟を失い、豹変する。

レグノス

魔国の宰相。
テトを追放した後、
恐怖政治を断行している。

ロイ

ニートの親友の一人。
聖物な剣士。

ステラ

ニートの親友の一人。
男装の少女。

ルカ

テラロッサ国の第二王子。
ニートの暗殺を謀ったが……

テト

一時は獣の姿になっていた、
魔国の元魔王。
グータラ気質のあまり、
玉座を追われたらしい。

ニート

アストリア国の第二王子で、
自称【殺潰士】の
心優しい元引きこもり。
現在は魔国に避難中。

プロローグ

アストリア国王城。地下牢にて。

本来玉座に座っているべき者が幽閉されていた。

「……アレク。考え直すのだ」

アストリアの現国王であるグレイ・ファン・アヴァドールは牢の中から呼びかける。

牢の外で彼に相對するのはアレク・ファン・アヴァドール。この国の第一王子である。

「もう手遅れですよ父上。この国は止まりません」

「なぜこのような真似をした？ 相談してくれたら別のやり方で協力だって出来たはずだ」

「協力？ ははっ、面白いことを言いますね」

アレクの弟、第二王子のニートが行方不明になって一か月が経った。

アストリア国南方にある都市、ヴィンリス。国立魔術学院高等部に通うニートは、クラスメイトと共にその地で合宿していた。ヴィンリスにはダンジョンがあり、攻略を通して心身を鍛えていたのだ。

しかし、あるうことか魔物暴走スケンピードが発生し、ニートはダンジョンに取り残された冒険者を救出しに



一人深層へと向かい、そして帰ってこなかった。

アレクは彼の訃報ふほうから部屋に閉じこもり、絶望の底に沈んでいた。過去の完全無欠だった彼からは想像もつかない状態だったのだ。

しかし、ある日を境に目に輝きを取り戻した。いや、その表現には語弊ごへいがある。何かに取り憑よかれたかのように行動的になったと言うべきだろう。

「父上には野心がない。イスカル国を支配下に置いた時点で満足したでしょう？」

「それは……」

「父上の願いはこの国を存続させること。それ以上の願いは一切なかった」

大陸を統治する五つの大国のうち、東端のアストリア国は国土が狭く、強い軍も持たない。三英傑と呼ばれる、文字通り一騎当千の英雄を配下にする事で、他国も下手に手を出せないという均衡状態を作っていた。

グレイの願いは、そんな弱小国家であるアストリア国を滅亡させないようにすること。その願いは、二か月ほど前に、北の隣国・イスカル国を支配下に置いた時点で達成されていた。

占領政策は順調に進んでおり、他の三国も慎重に事の成り行きを見守っている。これなら余程のことがない限り、滅亡することはない。

「だから僕が叶えますよ。五大国統一を」

アレクはにやりと口角を吊り上げる。

「そのために国民を強制的に徴兵するのが正しいと思うのか？」

グレイはアレクに向けて、初めて威圧のある声を放つ。

グレイが地下牢に幽閉されている理由。それはアレクとの政治方針の違いだった。

ちなみに彼の母であるシャーロットは別の施設に幽閉されている。と言っても地下牢のような場所ではなく、住み心地も王城とはあまり変わらない場所だ。

「徴兵令に何か問題でも？」

「……っ！」

「そもそも今までのやり方が生温なまぬるかったですよ。発明の国？ ただ戦いから逃げる言い訳に過ぎません」

アストリア国は別名、発明の国と呼ばれ、かなり文明が発展しており、戦闘職の八割は魔術師という、魔術に特化した国であった。彼らは普段は学者や冒険者として仕事をしていて、自分の好きなことを追求している者が大半だ。有事の際には戦ってくれるが、国に仕えているわけではないので、融通も利かない。

アレクはその魔術師たちを強制的に徴兵し、さらには戦闘職ですらない一般市民すら戦争の兵士に仕立て上げた。

「まずは隣の邪魔なテラロッサから滅ぼします。もうイスカルの時のような面倒な工作は無しです。三英傑を最初から投入して一気に武力で滅亡させます」

「力で制圧してその後に何が残るといふのだ」

「さあ？ 何が残るんでしょうね？」

「……は？」

グレイは思わず哑然としてしまった。

今までの聡明なアレクからは考えられないような行き当たりばつたりの発言だったためだ。

「別に僕はその過程にも残る結果にも興味はありません。欲しいのは五大国統一という事実のみ」

「何がそこまでお前を突き動かす？」

アレクの行動原理はニートのみ。そのニートはもういない。

そのため、グレイは不思議で仕方がなかった。

どうしてこれほど急にアレクが行動的になったのか。緻密ちみつな計画で動いているわけでもなく、さりごとで自暴自棄じぼうじきになっていくわけでもない。

するとアレクは少し考えた末にゆっくりと口を開いた。

「……約束してくれたんですよ」

「約束？」

「ええ、世界を統一すれば『神の御業みわざ』について教えてくれると」

「なっ!？」

グレイは目を見開いて驚く。

普通なら正気を疑うところだが、グレイには心当たりがあった。

「まさか……影の王がそう言ったのか？」

アストリア国の三英傑の一人、影の王。

他の二人——勇者や賢者と比べると謎に包まれた人物で、彼の正体は王族ですら正確に把握出来ていない。

「ええ、流石は『転生の儀式』の術者ですね」

『転生の儀式』。アレクを地球からこの世界に転生させた禁忌の儀式だ。

その儀式を主導したのが影の王であり、代々二百年ごとに行われてきたこれまでの儀式も先代の影の王達が主導してきた。

影の王は他の賢者や勇者と違って、ある一族が肩書を引き継いでいる。

「ニートを生き返らせる気か……！」

「ええ、そのためには僕は手段を選びません。この大陸が血の海になろうと知ったことじゃない」

「そんなこと不可能だ！ あやつの戯言に過ぎない！」

「僕を転生させるほどの秘術を使う人間ですよ？ 戯言と決めつけるのは早計です」

「仮にだ、ニートが生き返ったとして、地獄に変わり果てた世界を見て喜ぶと思うのか？」

「たとえ地獄でもニートなら天国に変えてくれる。何と言ったって僕の弟は英雄ですから」
グレイは眉間を指で押さえて黙り込む。

妄信的なアレクに、もう何も言い返そうとはしなかった。

どれだけ説得しようと、どれだけ言葉を重ねようと、息子の耳に自身の言葉は届かないと理解してしまったから。

「また様子を見に来ますね」

アレクはそう言い残して地下牢を後にした。

王城に戻ると、彼を待っていたのは深刻そうな顔をした少女だった。

「お兄様……」

アレクとニートの妹であるアーシャだ。

彼女は表情を曇らせながらもアレクに尋ねる。

「本当にこれがニート兄様の望んだことなのでしょうか」

「……………」

黙り込むアレク。

しかし、すぐにパツと明るい顔つきになる。

「ああ、ニートだって望んでいるはずだよ」

「でも……」

「アーシャは気にしなくていい。問題は大人に任せておけばいいんだから」

徴兵令を出したアレクだが、学生や子供は免除されていた。しかし子供たちも大人が徴兵されたという事実は知っている。安心していられるわけがなかった。けれど今のアレクにはそこまで気にかける余裕はない。

「大丈夫……僕が何としても救ってみせるから……」
アレクはぼそりと、この場にはいない者へと小さく呟いたのだった。

一章 もう一人の引きこもり

お久しぶりです、アストリア第二王子ことニート・ファン・アヴァドールです。いや、もしかしたら「元」と付けた方が正しいかもしれませんが。

「はあ、本当にこのままでいいのかな」

俺はベッドの上でダラダラしながら情けない声を上げた。

「いいんじゃないかなあ」

隣のベッドには俺と同じくダラダラとしているテトがいた。

テトと言っても、アストリアで見慣れた獣の状態ではなく、人型の容姿をしているが。

現在、俺はテトと共に魔大陸にある小さな村に泊めてもらって、ぐうたらな生活をしていた。

何故このような状況になっているのか説明するには、一か月ほど遡る必要がある。

夏休みに行われたヴィンリス戦闘合宿の最終日。

俺は隣国テラロッサの第二王子であるルカにダンジョン内で最下層に突き落とされ、何の因果か魔大陸に転移した。

そして転移してすぐに人型となったテトに打ち明けられた。

『ようこそ魔大陸へ。元魔王として君を歓迎するよ』

ここからはテトによる情報になる。

魔大陸とは、五大国の西端に広がる大森林を越えた、その先に広がる地のことを指す。人族が大森林を抜けたという話は今までになく、まさか森の向こうに人が住んでいるなど、五大国に暮らす者は誰も想像していないだろう。

そして、その地には人族とは異なる、二本の角が生えた『魔族』という種族が、『魔国』という名前の生活圏を築いていた。

魔大陸にやってきて、最初に俺が考えたことはただ一つ。

——早く家に帰りたい。

早く家に帰ってぐうたらしたい、という気持ちはもちろんある。

しかし、それ以上に、他国のスパイであるルカの存在や、自分が生きていくということを家族に知らせたかった。

けれどそれは叶わなかった。

『転移魔術が……使えない？』

そう、魔大陸では転移魔術が使えなかった。転移魔術だけではない。魔術そのものが使えなかったのだ。

ヴィンリスのダンジョンの中層以降で起きた現象と同じである。

徒歩で大森林を抜けて五大国に帰る場合、テトがざっくり計算したところによると、五年以上の歳月が必要らしい。そんなの、引きこもりの俺には無理だ。

こうして帰る手段を失った俺は、洪々テトと一緒に行動することになったわけなのだ。

そして俺たちは、転移した場所から一番近くにあった小さな村で生活をしている。

「それにしてもテトが元魔王だったなんてな」

「証拠だつて見せただろお」

テトは面倒くさそうに俺に向けて手の甲を見せてくる。

そこにはうっすらと紋様のようなものがあった。これが王族の証らしい。

今こうしてぐうたら生活が出来ているのも、この村の長おきに対して、テトが王族であることを証明したためだ。

俺たちは現在、衣食住を無償で提供してもらっている。

何故俺まで、と思うかもしれないが、護衛という体でテトが話を通してくれた。

ちなみに、俺が魔族という種族を知らなかったように、魔族側も人族の存在、それこそ大森林の奥に五大国があることを知らない。

そのため俺は、角のない可哀そうな魔族という扱いになっていた。

「つてかテトは、魔王に戻らなくていいのか？」

「何回その話するんだよお。ボクが玉座に帰ったところでいいことないし、それに帰ることすら出来ないよお」

「そもそもなんで『元』魔王なんだ？」

テトからは元魔王ということ以外何も聞かされていなかった。どうして元なのか、どうしてアストリアの路地裏で傷だらけになっていたのか。

テトは俺の質問に対して少し考えた末に口にする。

「話せば長くなるんだけど……話さないとダメ？」

「うん、ダメ」

実は俺たちはこの一か月、ダラダラするだけで何もしていない。俺もテトから大まかに魔大陸の情報を聞いただけで、何か行動したわけではない。

いつもならだらしのない俺を叱ってくれる人がいる。

しかし目の前にいるのは、さらにダラダラしているテト。

流石の引きこもりの俺も、このままでは危ないと気づいてしまった。ここから少しずつでも進まなければならぬ。

「ボクの父は、ボクが十歳の頃に早くに亡くなってねえ。だから僕は十歳で魔王になったんだあ」
テトは気だるげな口調で話を続ける。

「でも十歳の子供には、政治や魔王の務めなんて何も分からない。だから宰相さいしやうに全て任せてたんだあ」

「宰相？」

「うん、ボクの代わりに仕事をやってくれる人。だからボクはやる事がなくなって、こんなぐうたらな性格になったんだよねえ」

テトの気持ちも大いに分かる。

もし俺が十歳の頃に、父がいなくなつて国王になれと言われても無理な話だ。

「でもねえ、半年ぐらい前かなあ。最近になつてその宰相にも呆あきれられちゃつてねえ。魔王城から追放されちゃつたんだあ」

俺も父から半強制的に学院に通わされたが、家から追い出されることはなかった。かなり厳しい教育のようにも思うのだが、魔族にとつては普通のことなのだろうか。

それは後で聞くとして、まだ一つ疑問は残っている。

「テトはなんでアストリアにいたんだ？」

「んーつとね、魔王城から追放されてダラダラしてたら一瞬で金を使い果たしちゃつて……どうしようかと思つてたら、声をかけてくれたおじさんがいたんだよお」

「おじさん？」

「楽しんで稼げる仕事に興味ないかって声をかけてくれてさあ。ついてつたら色々事件に巻き込まれ

ちゃってえ」

「そろそうなるわ」

思わずツツコミを入れてしまう。

世間知らずな俺でも分かる、そんな甘い誘惑に乗っちはいけないことなんて。

「で、逃亡生活していて、気づいたらアストリアに飛ばされて、ニートに保護してもらったんだよねえ」

「テトが狼みたいな姿になってたのはなんだったんだ？」

「それは魔力が原因かなあ」

「魔力？」

「魔大陸の魔力と五大国のある大陸の魔力は性質が異なるんだよねえ。どうやらその性質が原因でボクはあっちでは獣化しちゃうらしい」

「へえ……それは不便だな」

「ちなみにニートがここで魔術を使えないのも、それが原因だねえ。ほらっ」

そう言っつて、テトは目の前で小さな炎を発生させた。それは明らかに、俺が今使えなくて困っていた魔術によるものだった。

「なるほど……じゃあダンジョン内で魔術が使えなかったのも……」

「ダンジョンの最下層には、魔大陸につながる転移門があるからねえ。そこから魔大陸の魔力が溢

れ出てダンジョン内に充満してたんだと思うよお」

テトの説明で納得がいった。

上層では魔術が使えるのに、階層を降りていくにつれて魔術が使えなくなった理由。それは、あちら側の魔力の濃度が薄くなっていたためらしい。

「じゃあテトが転移魔術を覚えてくれたら、俺は帰れるんじゃないのか？」

「無理だねえ。そんな化け物みたいな魔術、ボクには使えないよお」

「慣れたら意外と簡単だと思うんだけどな？」

「……はあ、そもそもキミが化け物だったねえ」

「え？　なんて？」

「いいや、転移魔術なんて術式が複雑すぎて見てるだけで頭が痛いし、仮に覚えられたとしても、使えるようになるまで十年以上の月日はかかるねえ」

「そんな……」

一瞬、希望の火が見えたと思ったが、すぐに掻き消されてしまった。

俺はもうアストリアには帰れないのだろうか。

そんなことを考えていると、テトが思いついたように口にする。

「まあでも、帰る手段なら一つはあるねえ」

「本当!?!」

「まあ難しいけどねえ」

「教えてくれ！ どうすれば帰れるんだ!？」

俺はテトの両肩をがっしりと掴んで離さない。

「もともとダンジョンの転移門は、千年以上前の人魔大戦争じんまで使われていたものなんだ」

「人魔大戦争？」

「まあ昔は人族と魔族が戦争してたつてこと。転移門はその時の、敵陣に乗り込む手段みたいなものだねえ。別の転移門に移ることも出来るし、想像した場所に転移することも出来る」

そのような歴史は聞いたこともなかったが、似たような話は、昔の英雄の伝記小説で読んだ覚えがある。まさかあれは空想ではなく、史実だったのだろうか。

「でも戦争は終結した。だから魔大陸にある転移門はほぼ破壊されたんだあ」

「ほぼ？」

「そう、一つだけ、確実に残ってるんだよねえ」

「どこにあるんだ？」

「魔王城」

テトは俺の瞳を見てきつぱりと言いつつ放った。

「……………」

気まずい沈黙が流れる。

テトが難しいと言っていた理由も分かった。

魔王城なんて、王族でなければ入ることすら不可能なんだから。

しかし、だ。今の俺の目の前には何故か元魔王がいる。

「テトが魔王城に戻れば使えるんじゃないのか？」

「それが難しいんだよねえ。一度追放したボクを迎え入れてくれるとは思えない」

俺はテトがどのような名目で追放されたのかを知らない。

ただ単に「頭を冷やせ」ということなのか、宰相が野心を抱いて反逆したのか。

テトの話聞く限り、後者に近いような気がする。

「多分今頃、宰相が魔王の代わりとなる地位に就任してるだろうし、別にボクは、宰相が王になればいいと思ってるからねえ」

テトは不貞腐ふてくされるわけでも悔しそうにするわけでもなく、本心からそう口にしてるように見えた。

ここまで話を聞いて、テトと俺は境遇が似てるなと改めて思った。

俺も王位などには興味がない。兄であるアレクがアストリアの次期国王になるのも納得がいく。逆に自分が王になればと言われたら、困ってしまうだろう。

それはともかく、魔王城が無理でも、転移門はもう一つあるはずだ。テトがアストリアに飛ばされたのも、きっと魔国のどこかにある転移門を踏んだに違いない。

俺のその推理にテトは感心していたが、確証がないから、と首を横に振った。

「でもボクはニートが帰るのに協力したいとは思ってるよお。キミやシャーロットさんには助けってもらった恩があるからねえ」

シャーロットとは俺の母上のことだ。母上は俺が学院に行っている間、テトの面倒を見てくれたりしていた。

「なら情報収集ぐらいは始めないとな」

何をするにしろ、情報は必要だ。

テトが魔大陸に詳しいと言っても、それは半年以上前の情報に過ぎない。

情報の重要性はテトも理解しているようで、体をゆっくりと起こす。

「そうだねえ」

俺たちは重い腰をようやく上げたのだった。

まず手始めに、この村で一番の情報通であろう村長から話を聞くことにした。

村長の家に招かれた俺たちは、客室で彼の正面に座る。

村長という役職の割に、見た目は中年ぐらいだ。年齢が若いのか、あるいは、魔族と人族では歳の取り方が違うのか。

初めに聞いたのは、元魔王であるテトの現在の立ち位置について。

「元魔王様なら、現在は重要指名手配犯として二億の懸賞金がかかっています」

「はっ」

一つ目の情報から、俺たちは啞然としてしまった。

「えっと……ボクを捕まえたら二億貰えるってことお？」

「そうなりますな」

村長は淡々と口にした。

「なあテト。俺が君を捕まえて、その報酬で転移門を使わせてもらうって作戦はどう？」

「ダメに決まってるだろお!? ボク殺されちゃうよお！」

魔大陸に来てから初めて、テトが大声を上げた。

思わず茶化してしまったが、無理もない。久しぶりに地元に戻ってきたら、重要指名手配犯として懸賞金がかけられているのだ。

俺なら泣いてしまうかもしれない。

「ならなんで村長はボクを捕まえなかったの? なんで匿うようなことをしたの?」

テトは不思議そうに村長に尋ねる。

確かにテトの言う通りだ。この一か月、テトを捕まえる隙なんていくらでもあった。

自分たちで捕まえなくとも、街まで行って警邏の兵士に通報するとか、いくらでも手段はあったはずだ。

正直に言うと、この村はたいして栄えてもいなければ裕福そうにも見えない。二億なんて大金、喉から手が出るほど欲しいだろう。

なのにこの村の人たちは俺たちに優しくしてくれた。無償で衣食住を提供してくれたのだ。

「先代の魔王様には感謝してもしきれませんから……」

「父に感謝？」

「はい。魔王大陸はお父上の代までカースト制度がありました。身分が高い者が偉い。身分の低い者には人権がない。そんな世界でした」

村長はまるでその時代を生きていたかのようにしみじみと語る。

「しかし先代の魔王様がカースト制度を撤廃てくばいなされたのです。そのおかげで、この村の子供や孫たちは教育を受けられるようになり、生活の水準も大きく上がりました」

それまで、教育を受ける権利は、貴族や金持ちにしか与えられなかった。先代の魔王はそれを改革し、誰にでも平等に与えられる権利としたそうだ。

他にも貧しい村には補助金を出したり、今まで働ける場所が少なかった下民に働ける機会を与えたりしたらしい。

「先代の魔王様はまさに救世主でした。あのお方に救われた魔族は何百万人というでしょう」

「父がそんなことを……」

テトは目を丸くして驚いた様子だった。

「そんなお方のお子様を捕まえるなど出来るはずがありません」

「……………」

村長の説明を受けてテトは黙り込む。

彼にはどこか自責の念が滲んでいるように感じられた。

「それに宰相様に味方したくありませんので」

「え？ 宰相は父に劣らず優秀じゃないかあ」

村長の発言にテトは困惑する。

テトの説明では、先代の魔王が亡くなってからずっと国の舵かじを取っていたのは宰相だったはずだ。そんな優秀な人物なら、先代の魔王と同様に国民から好かれていると思っていた。

すると村長は少し憤りをあらわにしながら言った。

「魔王様はご存じないとは思いますが、一つ噂があります。今の宰相様——レグノス様が先代の魔王様を殺したのではないかと」

「ええ!? な、何を言ってる——」

「そうであれば、魔王様を追放したのも納得がいきます。宰相様は、自分が玉座に就くためなら手段を選ばないお方なのです」

「考えすぎじゃないかなあ？ 玉座に就きたいなら、今までいつでもボクを殺せただろし……」

テトは苦笑しながらそう返す。

今まで絶対的に信頼していた人物が、実は父親殺しの犯人だった。そう聞かされてすぐに納得出来る者はいないだろう。

「それに父は病気で亡くなったんだあ。そんなのただの噂に過ぎないよお」

「本当にご病気だったのでしょうか？ 魔王様はしつかりと確認なさいましたか？」

「うん、医者だつてちゃんと……」

「テト？」

そこまで言つてから、テトは沈黙した。しばし考え込んでから、慎重に口を開く。

「確かに医者からは何の病気が詳しく聞かされなかった……それに父は急死だった」

テトの中で、点と点が繋がっていったのだろう。徐々に顔が青ざめていく。

「でも、宰相は、これまでボクのために尽くしてくれてたんだ」

「そもそも魔王様はどのような形で追放されたのですか？」

「どのようにつて……ある日、急にボクの部屋に刃物が入ってきた者たちが現れて……」

「明らかに殺されかけてるじゃないか！」

俺は思わずテトにツツコミを入れてしまう。

「いや、てつきりボクは今までダラダラしてたから怒られたのかとお……」

「……………」

俺と村長は絶句してしまった。

村長が絶句しているのを見るに、どうやら魔族の家からの普通の追い出し方ではないようだ。というか、よくその状況でテトは生き延びられたものだ。

鈍感なのか、楽観的なのか。まあこれまで命の危険を感じずにぬくぬく育ててきたのならその両方だろう。

「宰相様が実は最初から虎視眈々と玉座を狙っていた……そうは考えられませぬか？」

村長は再度確かめるようにテトに尋ねる。

テトが答えに詰まっている中、俺は聞いていてずっと疑問に思っていたことを口にした。

「なんで村長さんはそんなに詳しいんだ？ 一介の村人にしては知りすぎじゃない？」

「二トト？」

テトと村長で盛り上がっている中、俺はずっと気になっていた。どうして王都の人間でもないただの村人が、これほど上層部の情報に詳しいのか。

そしてもう一つ気になっていることがある。

「それに、村人にしては鍛えすぎでないか？ 村長は殴り合いで決めるのか？」

服の上からでも分かるくらいに、村長の肉体は鍛え抜かれている。

俺はいつも近くで、クラスメイトで剣士のロイを見てきたからなんとなく分かる。この村長は剣士としてかなりの実力者だ。

「ははっ、あなたは観察眼に長けているようですね」

村長は観念したように笑うと、俺たちに一つのを差し出してきた。

「剣？」

村長が差し出してきたのは鞘に収まった一本の剣。その剣の柄には、複雑な紋様が刻まれていた。

「これは……！」

テトは見覚えがあったらしく驚愕している。

「私は昔、王宮騎士団に勤めていました」

アストリアの王宮騎士団のようなものだろうか。となればこの屈強な肉体にも納得がいく。

「父の剣だったの？」

「ええ、この村に駐在しているのも、周辺の魔物の退治にと派遣されたためです」

郊外の村人の安全を保障するために自分の配下を使うとは、先代の魔王の人氣も頷ける。

「それで村長はボクの父が殺されたと思う？」

「先代の魔王様——ネク口様の死には疑問点がいくつもありませんでしたが、それに配下に病の説明もなしに亡くなるようなお方ではありません」

「……………」

これまでの村長の説明を受けてテトも思うところがあるのだろう。眉間をつまみ、悩ましげに考えこんでいた。

すると、そんな静寂を破るかのように、一人の青年が部屋に入ってくる。青年は血相を変えて大

声を上げた。

「村長！ 一大事です！」

「今は大事な話をしているから誰も入れるなど言っただらう？」

村長は睨みつけるように視線を送る。

しかし青年も、よほどの一大事なのか引く気配がない。

「宰相が動き出しました！」

「……………なんだと？」

村長の顔色が変わる。

「王宮内で従事している魔王派のメイドや執事、騎士たちを肅清しようとしているという情報
が……………」

「肅清？」

俺は聞きなれない単語に首を傾げる。

すると村長が重い口ぶりで説明してくれた。

「魔王様が消えた後、宰相が始めた非人道的な改革の一つです。敵対する者や不満を持つ元貴族など、危険と判断した者たちを処分しているのです」

「なっ……………」

俺とテトは息を呑んだ。

「これまで一部の元貴族や商人などが粛清されています。そして今回、とうとう魔王様の派閥の者……正確に言えば、ネクロ様の頃より仕えていた者たちを処刑しようとしているのです」

村長の様子を見る限り、先代魔王に忠誠を誓っていた者たちの大部分は宰相を疑い、嫌っているだろう。宰相が実権を握るくらいなら、テトに戻って来てほしいと考えているはずだ。

そんな反対派は、宰相にとっては邪魔でしかない。

彼らを排除するついでに、その情報を流して、隠れていられなくなったテト本人も誘き出す魂胆こんたんなのだろう。

俺ははじめ、宰相はテトの代わりに国政を担ってくれる有能な臣下だと思っていた。

しかし、情報を聞けば聞くほど、善人とは到底思えなくなっている。極悪非道そのものだ。

「テト、本気でお前は、このまま宰相に任せていいと思うのか？」

気づけば俺はそんな質問をテトにしていた。

ここは魔国だ。部外者である俺が口出しすべきことではないのは十分理解している。それでも尋ねずにはいられなかった。上手く説明出来ないが、同じ王族として他人事とは思えなかったのだ。

「ボクは……」

テトは言葉を詰まらせる。

これまで信頼を預けてきた相手が実は自分の命を狙っていた、ましてや自分の父を殺した可能性もあり、自分の配下に危害を加えようとしている。

急にこのようなことを言われても、困惑するばかりで情報を処理出来ないだろう。

(ルカ……)

俺は悩んでいるテトを横目に、優しい顔で笑う冒険者の青年の姿を思い出す。

信頼していた。学院外で出来た初めての友達だと思っていた。

でも本当はテラロツサの第二王子で、彼にとって俺は、ただの敵国の王族でしかなかった。

テトと違って、一緒に過ごした時間はわずか二週間。されど二週間。

(いや、今はテトのことを優先しよう)

憎めばいいのか、謝ればいいのか、怒ればいいのか、再び手を差し出せばいいのか。

今の俺が悩んだところで結論が出ることもない。

まずはテトの問題を解決して、家に帰る方法を考える方が優先だ。

「ボクはただらだりたい、ずっと引きこもっていたいんだよねえ」

それはテトの、何にも替え難い欲求だ。

俺が穀潰士こくつぶしに憧れるように、テトもダラダラと生活する日常を求めている。それは第三者が干渉することで変わるような、やわな信念ではない。

それは村長にも伝わったようで、視線を落として残念そうに口を開く。

「……そうですか。であれば——」

「でも、こんなボクに期待してくれる人がいた……こんなボクが本気で王になれると言ってくれた

人がいたんだ」

「……っ！」

諦めかけていた村長の言葉を遮って、テトは語る。

「ボクには全国民を守る力も覚悟もまだない。でもボクが手の届く範囲なら頑張りたい」

かつて俺は、家族を、国民を守りたいとロイに語った。テトを見ながら、まるでこれまでの自分を振り返っているような感覚だった。

「魔王城にいるボクの配下を守りたい。だからボクは宰相を止めに行くよ」

今までののんびりとした口調とは打って変わって、テトははっきりと言いつつ切った。

「そしてボクは、自分の目で宰相が本当に噂のような人物なのか確かめる」

この宰相の動きには何か事情があるかもしれない。テトはそう考えているらしい。

確かに話だけを聞いている村長とは違い、テトは宰相と長い時間を共に過ごしている。テトにか分からぬこともあるだろう。

「魔王様……」

俯うつむいていたはずの村長は顔を上げ、希望を見出したかのようにテトを見ている。

しかし、すぐに落ち着きを取り戻し、咳払いをしてから話を戻した。

「ですがそれは険しい道のりです。無策では間違いなく宰相の掌ひらで踊らされるだけです」

「分かっているよお。戦力が必要だねえ」

もちろんテトも最初から戦争を仕掛ける気ではないだろう。出来れば穏便に対話したいはずだ。けれど対話とは、お互い対等な関係であるからこそ成り立つものだ。力の均衡きんこうが崩れていれば、一方がもう一方を力でねじふせることが出来る。

美しくはないが、対話には力が必要。それがこの世の理ことわりである。

「村長さんみたいに宰相を止めたい人やテトの配下を集めても足りないのか？」

「全然足りないねえ。ボクがもつと王らしい活動をしてたらよかつたんだけどお」

テトは申し訳なさそうに言った。

実際にテトは引きこもりであり、宰相が政を代行していたことは国民や臣下たちにも周知の事実。血筋をとるか、実力を取るか。国民の答えは当然一択である。

そう、実力だ。

力ない者の主張は俺がいた五大大陸でも、そして恐らく魔国においても受け入れられない。

先代魔王に忠誠を誓っていた者以外は、宰相側につくと考えられる。

「頼りの二ートは魔法が使えないしねえ……二ート？」

「あ、いや、戦力に関してなんだけど、もしかしたら俺も少しは役に立てるかもと思って」

俺が黙り込んでいるのを見て、気にかけてくれるテト。

確かに俺の戦いは魔術頼り。ヴィンリスのダンジョンでは魔術が制限されていたため剣を握ったが、それでも魔術を使っている時と比べれば遠く及ばない。

最後の方の戦いで何か挿んだような気はしたが、それも曖昧。

なら戦力にはならないかと言うと、それは否。一つの可能性があった。

「魔道具があれば俺も役に立てると思う」

「魔道具？」

「もともと俺は魔術と魔道具を創るのが趣味だったんだ。学院に入ってから魔術の勉強ばかりで魔道具を作る時間はなかったんだけどね」

俺が引きこもっていた時代、魔道具創作は俺にとって一番の趣味だった。

自分に害するものを全て遮断する『日焼け止め』であったり、冷たい風を送ってくれる『えあこん』であったり、敵を一瞬で無力化する『殺虫剤』であったり。

どうすれば楽出来るか、幸せな引きこもり生活を送れるか、一所懸命考えたものだ。

「魔道具であれば外部から魔力を直接回収するから、俺も戦力になると思う。って言っても俺が作る魔道具は特別製だから、俺以外が使うことは出来ないけどな」

魔術は、術者の魔力を使つて発動する。

魔道具は外部から直接魔力を取り込んで発動する。

魔術の方が細かい調整が利くが、自身の魔力が尽きたら使えなくなる。……とにかく一長一短なのだが、細かい説明は今はいいだろう。

「この鞆かぶとの中にいくつかの魔道具と、魔道具を作るための基本的な材料はあるんだ」

学院に入学してからは、自身の成長のために魔道具は使つてこなかったが、今はそうも言っていない。戦闘に使える魔道具を全て使うべきだ。

「それは朗報だねえ。でも力が足りても数が足りなければ難しいんだよお」

「その数つてのはどのくらい必要なんだ？」

「それを説明するには、魔大陸の勢力図を説明しなければなりません」

俺の疑問に答えてくれたのは村長だった。

「魔大陸の勢力は大きく分けて三つ存在します。一つ目はネク口様の頃より仕えていた現魔王派です。実際に協力してくれるのは、おおよそ千といったところでしょ」

「千か……」

俺はため息交じりの声を漏らしてしまった。

千なんて軍と呼べるものではない。

少し前に起きたアストリアとイスカルの戦争。

イスカル軍は二十二万の戦力を用意していた。国家の命運を懸けていたというもあるが、それでも千が少ないのは明白だろう。

「二つ目は宰相派です。これまでの実績や今の状況もあり、国民の大半が宰相側につくでしょう。戦力だけで考えると……少なくとも六十万はいるでしょう」

「六十万!?!」

俺は思わず声を荒らげる。

戦時中ならともかく、徴兵をしていない状態で六十万とは……五大国で一番大きい国でも、この数は用意出来ないだろう。

「千対六十万か……」

比率だけ見れば、一人が六百人も相手にしなければならぬのだ。

誰が聞いても無理と答えるだろう。

「三つ目は無所属派です。単純に王政に興味がない者や、ファルロス軍などですね」

「ファルロス軍ってなんですか？」

「別名、中立軍。王族や王政に従わず、独立している組織のことです。無論、魔国にも与くみしていません。ネクロ様の時代から存在している組織で、おおよそ四十万ぐらいの戦力と考えていいでしょう」

「四十万も？」

「ネクロ様が何度も傘下に入れようと試みたのですが、未だに魔大陸を統一することが出来ていないのです」

四十万ともなれば一国ほどの戦力である。

強制的に解散させたり従わせたりしようとすると、大きな戦になる可能性がある。そのため先代の魔王も、無闇に手を出すことが出来なかったのだろう。

「彼らはこれまで一切魔国に関わってきたことはありません。今回も動かないと見ていいでしょう」

中立軍という名の通り、これまで中立を保ってきたらしい。

魔大陸には国が一つしかないと思込んでいたが、魔国に従わない集団がいくつかあるらしい。

その中でも一番大きい組織がファルロス軍だとか。

「……決めた」

「テト？」

隣で黙って聞いていたテトが小さく呟いた。

いつも気だるげな彼だが、どこか楽しそうだ。

「ファルロス軍を味方につけよう」

「……まふ。」

俺と村長は自分たちの耳を疑ってしまった。

村長の先ほどの説明を聞いていなかったのだろうか。

しかしテトは平気な顔だ。

「戦力が足りないのなら、ファルロス軍に手伝ってもらえばいいんじゃないかなあ」

「ま、魔王様？ ファルロス軍はネクロ様ですらどうにも出来なかったのですよ？ どうなさるおつもりですか？」

「どうって、ボクとニートで会いに行って『力を貸して』ってお願いをするんだよお」
「……………」

俺と村長は当然のように絶句してしまう。

「お願いして協力してくれるなら、中立軍なんてやってないんじゃない？」

「まあやってみないと分からないでしょ。今のところ他に選択肢はないしねえ」

確かにテトの言う通り、今の俺たちには、宰相の戦力に対抗出来るような味方は他にいない。

賭けにも思えるが、やってみないと分からないのも事実。

「ってことで村長。ファルロス軍の居場所を教えてほしいだけだよ」

「……幸いなことに、ファルロス軍が領地として占領している場所はここからそう遠くはありません。馬車であれば二日たどり着くでしょう」

この村は魔大陸の北方に位置し、魔王城がある王都からはかなり距離があるらしい。

そしてこの村のさらに北に行けば、ファルロス軍が統治している街があるとか。

もし自分たちが魔大陸の南などに転移させられていたら、この計画は破綻していた。ダンジョンの転移門に立った時、テトが直感でこの辺りをイメージしてくれたらしいが、つくづく俺たちは運が良い。

「ならボクの飛行魔術で飛んでいけば数時間でたどり着くねえ。そのくらいの距離なら、ボクの魔力も足りると思うよお」

テトが飛行魔術を使えるのであれば確かに大幅に時間を短縮出来る。

しかしテトの実力はどれくらいなのだろうか。

飛行魔術もしかり、瀕死の状態だった俺を完治させた治癒魔術もしかり。引きこもっていたという割には、それなりに訓練を積んでいるように思える。

「テトは他にはどれくらい魔術が使えるんだ？」

「ある程度は使えるけどボクはニートには遠く及ばないよお」

「じゃあ学生レベルぐらい？」

「……………」

「ん？ どうした？」

「いや、その無自覚さは魔大陸でも健在なんだなあと思ってたねえ」

「無自覚？」

テトがジト目で俺を見ているが、何を言っているのかよく分からなかった。

「まあいいやあ。ってことで村長。ボクたちはファルロス軍のところに行くことにするよお」

「本当に行かれるのですか？ せめて人を集めるとか……………」

「逆に人集めていった方が警戒されるでしょ。それにニート一人いれば護衛は足りるからねえ」

テトはそう言っただけの肩に手を置く。

信頼してくれるのは嬉しいが、流石に俺でも四十万人を相手にするのは無理に決まっている。

何か逃亡用の魔道具を作っておかなければならぬぞうだ。

「ニート、さっき言ってた魔道具の製作日数はどれくらいほしい？」

「基本的なものは持つてるし、一日あれば十分かな」

「じゃあ明日早速出発だねえ。ってことで今日はダラダラ出来るう」

そう言っただけでテトは足早に村長の家を出ていった。おそらく泊めてもらっている宿に帰ったのだらう。

残された俺はテトを追わず、正面に座っている村長と話を続ける。

「村長さん、あの一ついいですか？」

「どうぞ、何でも聞いてください」

「本当にファロス軍に協力してもらえることなんて可能なんですかね？」

「ほぼ確実に無理でしょうな。私も以前、一度ネクロ様と遠征でファロス領に赴いたことがあります。しかし領主で軍のリーダーでもあるファロスは、魔王様の提案に眉一つ動かしませんでした」

村長は重々しい口調で続ける。

「武力で制圧しようにも、ファロス軍は手練ればかりでこちらの軍勢も大きな損害を被る。そのため長年放置されてきたのです」

「そんな場所に俺とテト二人で行こうとしているわけですよ……」

「その通りです。私としては絶対反対です。しかし、私たち魔王派を集めたところで宰相と話すことすら叶わないでしょう。すぐに捕まって処刑されるか監禁されるのがオチです」

「かなり難しい状況ですね……」

「はい、私たち魔王派にもっと力があれば良かったのですが、ネクロ様が亡くなられた後はわずかな忠臣以外、宰相派になってしまい……」

「それは仕方ないですよ。そもそも何もしてないテトにも原因が……」

「そこまで言っただけで俺は黙り込んでしまった。言葉が続かなかった。」

「ニート様？」

「あっ、いえ、何でもありません。俺も宿に帰りますね。また夜にでも話をさせてください」

俺は村長に頭を下げてから部屋を後にする。

テトと俺の境遇は、奇跡と言っただけでいいほど同じだ。引きこもりで、怠惰で、それでも家族を守りたいという信念はあつて。

そして今回、テトは最も信頼していた宰相と敵対することになった。

もし、だ。もし俺が第一王子であるアレク兄さんと敵対するような状況になったとして、俺はアレクに刃を向けられるのだろうか。俺はアレクに勝つことが出来るのだろうか。

無理だ。国民からの信頼が段違いすぎる。これまで培ってきたものが違いすぎる。

そんな絶対に勝てない相手にテトは立ち向かおうとしているのだ。

「……他人事じゃないな」

俺も、そんなもしもの世界が存在することを覚悟しながら宿へと戻った。

俺は宿に戻ると早速、魔道具製作に取り掛かった。

ちなみにテトは隣の部屋で爆睡していた。そのメンタルを見習いたいものだ。

「さて、最初に作る魔道具は決めてるんだよな」

テトには申し訳ないが、自分のために作る魔道具だ。

「この魔石を材料にすれば……」

ダンジョン攻略の際に採取した魔石を鞆から取り出す。

帰還石というものを覚えているだろうか。

ダンジョンから脱出するために使うもので、俺が持っていた二つの魔石はルカに破壊されてしまった。

しかし、それまでに仕組みの解析は終わっていて、別の魔石を使って復元することは可能である。ダンジョンにいないのに帰還石なんて作ってどうするんだ。そう思う人もいるかもしれない。しかし本当の目的は別にあつた。

「この帰還石に追跡機能をつければ……!!」

そう、俺が学院の担任であるルীগ先生からもらった帰還石には、追跡機能がついていた。ルイ

グ先生が生徒たちの居場所を確認するために特別につけたものだ。

もちろん俺は、その追跡機能に関しても解析済みである。

俺は作り上げた帰還石に追跡機能の術式を刻んでいく。

かなり複雑な術式で時間がかかるだろう。これをクラスメイト全員分用意出来るとは、流石はルীগ先生だ。

俺は一時間ほどの時間を費やして追跡機能を刻んだ帰還石を作り上げた。

追跡対象については、ルীগ先生の魔力を辿るようにしている。これは元々借りていた帰還石の仕組みがそうなっていたからだ。

しかも驚くべきことに、これはルীগ先生がいなくても作れてしまう。魔石に先生の魔力を直接こめるわけではなく、魔力の特徴を分析したデータを登録しているのだ。これなら材料さえあれば、いつでもどこでも、そして誰でも作ることが出来る。

「これでルীগ先生が気づいてくれたら……」

既に合宿を終えているため、ルীগ先生が帰還石を追跡する可能性はほぼないだろう。

けれど方が一、気づいてくれたら、俺が生存していることだけでも知らせることが出来る。

まあ気づいたところで、大森林を抜けて魔大陸まで助けに来ることは不可能なので、本当に生存を知らせることしか出来ないが、やらないよりはマシだろう。

「さて、次は……何を作ろうか」

防御面に関しては日焼け止めさえあれば何とかなる。大抵の攻撃はあれが防いでくれる。となると今必要なのは、攻撃用魔道具と逃亡用魔道具、補助系魔道具といったところか。

まず最初に攻撃用を考えていく。殺虫剤などの超接近戦用の魔道具はあるが、広範囲を攻撃出来るものがない。

「攻撃系は……『水鉄砲』にしよう」

昔読んだ空想本に書かれていた。

水を発射して敵を倒す武器。普通の鉄砲に比べれば弾が水であるため威力は劣るが、敵を無力化するぐらいは出来るだろう。

そもそも今回の相手は魔族。同じ人類だ。殺すのではなく無力化が目的だ。むしろ丁度いい。

昔、一度拳銃を作ったことがあるため、ある程度の構造は理解している。といっても拳銃は危険だからと兄のアレクに没収されてしまったけど。

俺は早速外側の型作りから行っていく。王城ならしつかりとした設備の中、魔道具を作ることが出来るのだが、あいにく今いるのは魔大陸の宿だ。

粗削りにはなるものの、このような状況を想定して鞆に入れておいた工具で魔道具を作っていく。型を作り終えると、そこに水魔術の術式を刻んでいく。別に魔術を使うわけではないので魔大陸でも可能だ。

水を『発生』、『凝縮』、高出力で『発射』。その三段階の動作を一つの術式で完成させる。

「よし、完成だ」

製作時間は二時間半。少し時間がかかってしまったがこのペースなら問題ないだろう。

「一つじゃ心もとないし、色々な水鉄砲を作ってみるか」

水鉄砲一つでは応用性に欠けるかもしれない。

そこで俺は『グレネード』や『ロケットランチャー』など、戦い方を広げられるように様々な水の武器を作り始めた。

そして時間は経ち、全てが完成した頃には既に太陽が沈みかけていた。

「テト、ちよつと実験するから意見が欲しいんだけど」

「んー？ 魔道具の実験かぁ。いいよ、楽しそうだし」

俺は隣の部屋で爆睡していたテトを叩き起こして、村の外まで出る。

今日作った水鉄砲の使用実験をするためだ。

「いっぱい作ったんだねえ。何だいそれは？」

「水鉄砲。水を弾丸として撃つ武器かな」

狙いは俺の身長の上の五倍以上ある巨大な木。ここ周辺で一番頑丈がんじょうそうなものを選んだ。

するとテトが隣で説明を始める。

「黒木かぁ、魔大陸で一番頑丈な木だねえ。武器の威力の検証なら、ちよつと傷をつけられたくらいで合格ってところかなあ」

そんな反応に懐かしさを覚える。アレクに魔道具を見せた時も、よくこんな反応をしてたっけ。「三十発撃ったら魔力の補充に少し時間がかかるって制約はあるけど、魔力さえある空間なら半永久的に使えるな」

「いやいや、ちよつと待つて……黒木を貫通した？」

「そうだな。二十発ぐらいで貫通したかな？」

「そもそも何その魔道具！ 上級魔術ぐらいの威力を何の代償もなく連射出来るのお!？」

「それが魔道具だからね。学院に通い始めてからは一切触ってなかったけど、やっぱり便利だな」

「ぼ、ボクが知ってる魔道具じゃないよお……」

テトは何故か頭を抱えるような素振りを見せる。

「ファルロス軍なんてニート一人いればいらんじゃ……」

「ん？ なんか言ったか？」

「い、いや！ 他の魔道具はどんなのかなあって」

一瞬何か聞こえたような気がしたが、テトはすぐに笑顔を作る。

「じゃあ次はロケットランチャーかな」

「ろけつとらんちゃー？」

「広範囲を攻撃出来るロケット水弾を撃つ魔道具、って言えばいいかな」

「それでもボクは知識がある方だと思ってただけ、聞いたことも見たこともないなあ。どう

やったらそんな発想が出来るんだい？」

「空想本かな。空想の知識とか技術を記した本なだけけど」

「その誰が書いたか分からない空想をニートは実現してるってことだよねぇ!？」

「そうだな。最初は難しかったけど、今なら何となく出来ると思うぞ」

俺の知識と技術の発想元は、空想本と伝記が大半を占めている。

引きこもりの俺にとって、その空想の世界や、英雄たちの逸話はとても魅力的で理想的で。

その頃は、その世界をどう実現するかしか考えられなかった。

「ロケットランチャーは魔力の充填に一分はかかるんだけど、その分威力は水鉄砲とは比べ物にならないんだ」

俺はそう言つて、黒木に向かってロケットランチャーを放つ。

放たれたロケット水弾は黒木に直撃し、見事に黒木が爆ぜた。下の幹だけが残り、上の部分は跡形もなく消えていた。

「アハハ……思ったより凄い威力になったね」

「……………」

苦笑いする俺と隣で黙り込むテト。

それから俺たちは日が落ちるまで魔道具の試用実験を行ったのだった。

翌日。俺は徹夜で魔道具製作に取り掛かっており、気づいたら朝日が昇っていた。大事な日に眠くならないのかって？

大丈夫。こんな時のために『エナジーポーション』という、飲んだら目がバキバキになるポーションを作っておいた。

我ながらなんて用意周到なのだろうか。

準備を終えた俺たちは、村の入り口から少し離れた場所にいた。

「どうしたんだテト？　なんか疲れてそうだけど」

「そりゃあんな魔道具を見せられたら疲れるよお……」

「エナジーポーションいる？」

「いらぬいよお！」

いつも気だるげなテトだが、今日はより一層気が重そうだ。

「それにしてもこの村にはお世話になったな」

「そうだねえ。ここに転移出来て本当に良かったよお」

この村には一か月お世話になった。村長以外にも村人たち全員が、俺たちよそ者に優しく接してくれた。

正直に言おう。最初は魔族が怖かった。

二本の角が生えた別の種族。初めて出会う種族。恐怖を覚えないわけがない。

けれどそんな恐怖は一日で消え去った。

「たまには外の世界もいいな……」

ずっと引きこもっていたら、この人たちに会うことは出来なかった。

もちろん俺は家が大好きだ。ダラダラするのが大好きだ。友達が大好きだ。

けれどこうして外の世界を実際に見て、感じていくたびに、自分の視野が広がっていく。

アストリアに帰った時に、家族やステラ、ロイなどクラスメイトにこの話をするのが楽しみだ。

「村長も連れていければ良かったんだけどねえ」

元王宮騎士の村長は、剣士としての実力はこの国でトップクラスだ。一般兵には何があっても負けないだろう。そんな彼が同行してくれば百人力だ。

けれどテトの飛行魔術では、二人も抱えていくことは不可能だった。

「まあいつでも駆けつけてくれるって言うてくれたし、それだけでも十分だろ」

「そうだねえ」

村長は別れ際にテトに約束した。

何かあればいつでも駆けつけると。

その目には、覚悟や思いのようなものが宿っていた気がする。

おそらくそれは、テトの心の成長にも繋がっているのだろう。

「はあ……やっぱり行きたくなくなってきたあ。宿に帰らない？」